

真 生

第一卷第五號

『自分の仕事は妻丈けは理解してゐる。朋丈けは眞に知つてゐて呉れると云ふた處で、矢張り表面を窺ひ得た丈けである。眞に私を知つてゐるものは私丈けである。吾れと偕なる佛のみである』
『塵う云ふやさしい慰め手よりも自己よりの慰め、如來よりの詞ほど嬉しいものは無い。何人から捨てられても、自己が自己より見放しにせられぬ程力強いものは無い。如來を失ひ自己を殺した程大なる損失はない』
『何人に阿附せやうともせぬ。氣兼ねしやうとも思はぬ。たゞ裡なる如來の導き給ふ儘、授け給ふ儘に生きるのです。それで私等の天地は宏寛無礙です、一つも遠慮する處が無く、常に自由に歡喜に充ちて割り進んで行ける』
『人は根本に和合性僧伽性を持つてゐる』皆全なる自己への忠實なる奉仕者なるべきである。それを皆が自分を淨くせずして苦んでゐる。何でも無い皆が本心に立ち還る事に依て僧團は將來せられるのである。連帶覺醒の上に人間 王國が建られる。自由人の樂土がある。』

信 仰 の 生 活

土 屋 觀 道

神の如く佛の如く眞に生きたいといふことは恐らく誰として異存のないところであらう。乍然實際生活に於てどれだけ眞剣にしかく生きやうとしてゐるかといふことは決して容易のことではない。昔からも眞に生きるといふことは生活理想の中心とはなつてゐるが自から此の理想に生き此の自覺に立つといふことは實に普大底なことではなかつた。乍然釋迦キリストの如き千古の偉人は已に此の理想を理想した人であつて、古來幾多の宗教家も此の心を心として生きやうとした人たちである。然らば神の如く佛の如く生るとは如何なる生活を云ふのであるか、夫は神の心を心とし、佛の心を心として自から神の生活を營むといふことである。若し直接に神を見、佛を見ることの出来ない人はキリストを見、釋迦を見るがよい、さうすれば必ずそこにキリストの生きた神の心、釋迦の生きた佛の心を見る。神の外に我なきキリストの外に我なき釋迦はその生活そのものが即ち神の姿佛の生活となつたのである。さればキリストを見、釋迦を見るものは又神を見、佛を見るものといふべきである。故に神の如く生き佛の如く生きるといふことは又キリストの如く、釋迦の如く生きるといふことである。即ち神を信じ佛を信ずるものは、又やがてキリストの如く、釋迦の如くに生きることをうるのである。故に私はキリストを愛し、釋迦を愛する、さうして今尙、キリストの人格、釋迦の人格の中に眞の神、眞の佛を見るのである。キ

リストは言つた。「我を見る者は神を見る者なり」と此のことばこそ眞に神を見、佛を體驗した人でなくば言得ない言葉である。私は此の一言の中にもキリストの全生命の躍動が見える。彼は今や單なる人としてのキリストではない、少くとも神を信じた、神の心を心とした彼、迷へる昔の人にあらずして、神を見、神の如くに一切を愛する神の子エス、キリストである。如何に彼が一切の衆生を愛したかは彼の十字架が正に其の事實を語つてゐる。又釋迦は佛心とは大慈悲是なりといはれてゐる。さうして自からは覺者佛陀と宣せられ、其の身を捧げて、一切衆生に供養せられた、實に此のキリストの十字架と、佛陀世尊の献身こそ衆生を思ふ愛の顯はれ、神の體現といはずして何といはふ、さればキリストを見、釋迦を見るものは即ち神を見、佛を見るものといふべきである。キリストは「神は愛なり」といはれてゐる、げに愛こそは神の生命であり、又キリストの生命であつた。而して釋尊は云つた、佛心とは大慈悲である」とこの外に佛も無く又釋迦もない。されば私共が神の如く佛の如く生ると云ふことは又釋迦の如くキリストの如く愛と慈悲とに生くるといふことにある。實に愛こそは私共の生命である。愛なくば何の人生ぞ、愛は人類生活の中心生命である。愛なきところに生命はなく、愛なきところに活動はない、活動は正に愛の流動ではないか、エス、キリストの十字架も佛陀世尊の献身も要するに衆生を愛する彼の生命の躍動であつた、されば神の如く佛の如く生るといふことはやがてキリストの如く、佛陀世尊の如く此の身と心を衆生の爲めにささげる愛の生活といふことにもなる。乍然私共の要求するものは單なる献身でもなく、又十字架でもない、十字架と献身は人の最も忌むところである、けれども此の最もいむべき献身と十字架にさへ喜んでつくことのできるといふことは衆生を思ふ愛の心の現はれては

ないか、されば献身と十字架とはそこに限りなき神の慈愛と佛の慈悲の輝くところと見なければならぬ。そこに眞實の神があり、佛がある、而してそこに始めて、眞の献身があり、十字架あるのである。彼のエス、キリストの十字架を見、彼の佛陀釋迦の献身を見よ、必ずそこには永遠の生命と限りなき絶對の向上とが働いているのを見るであらう。そして、この献身も十字架もキリストの如く神を知り、釋迦の如く佛を念ずるもののみが始めて之をよくするところのものである。祥りなきところに十字架はない、佛を念せざるところに献身はない、されば献身も十字架もそこに如來を中心とし、神を中心としたところのみ眞の光りといふべきである。そして神によつてのみ生きることのできた彼にして始めて神の如く一切を許し一切を愛することができたのである。故にキリストの十字架は罪の十字架にあらずしてむしろ祈りの十字架、愛の十字架であつた。そこにキリストの信仰がある。彼は遂に神の如き愛にみたまされて即ち十字架の人となつたのである。されば十字架は彼に於て正に神の心を心とした愛の現はれてあつた。

人として自分を愛せない者がどこにあらう。眞に自分を愛すればこそ神への祈りもあるのではないか、神に生き、道に生きるも自分が生きん爲めである。然らば神の如く、佛の如く完全ならんとすることはこれ皆自己愛の本心であるともいへる。然るにもかゝはらず、私共は何故に眞剣に祈らないのか、又何故に神の如く、佛の如く生きやうとせないのか、いひかゆれば私共は何故に自己の本心にそむくのか、人として誰かよくなりたくない者があらう、而かも事實は神の心にそむき自己の心にそむく、これ私共の大に反省憂慮すべきのところではないか。神の如く佛の如く眞に生きるといふことは又神の如く佛の

如く愛に生きると云ふことであらねばならぬ、神は愛である又道である故に愛と道とは神の心である。否神の愛こそは即ち神の道である。キリストの十字架も釋迦の献身もこの愛其のものの表はれてある。愛あればこそ救ひも起り、許しも起る、愛は神の心、佛の心である、故に神を信ずるものは又神の如く、佛を信ずるものは又佛の如く一切を許し一切を愛するに至るのである。「神よ我が凡てを許すごとく我も亦許し玉へ」とはキリストが私共に神を祈るべき道として教へ玉ふた處である。されば神の如く佛の如く生きんもの、誰か神の如く佛の如き愛の心に生きずしてゐられやう。茲に於て眞に神を信じ佛を信じた人々は又どうしても、神の如く佛の如き愛に生きずにはゐられない、從て神に生き佛に生きたいと願ふものにして、始めて、神の如く佛の如く一切を許し、一切を愛するにも至るのである。故に神を信じ、佛を信ずるものには愛が漲ぎ、一切を愛し一切を許す、そこに一切は同朋である。斯くて神の如く正しく、佛の如く慈愛に生きやうといふことはこれまた自然の進歩であつて、やがては自ら神とし生き佛として生きるといふことが人生最高の生活となるのも亦當然のことである。

乍然、神の如く佛の如くといふことは自分が未だ神でなく佛でない限りどうして眞の神を知り眞の佛を知ることができなのか、凡そ何事でも此の世のことは自分の力相應にしか之を知ることができないものではないか、まして人といふものはともすれば自分の得手勝手な利己主義を中心として一際をとりきめて、往々大なる誤りをなすことがある。されば自分で神だの佛だのといつたつても各々其の人其の人の一種の見解に過ぎぬものであつて、果して夫が眞の神であり又眞の佛であるかは之を判斷することはできないではなからうか、殊に近來神を見たの佛を見たの、見佛がどうの觀佛がどうの、自力がどう

の、他力がどうのとききりに論じたてる人々がまだまゝあるが、これ又何を中心とし何を規範として言ふのであるか、靜かに其の人の生活状態を眺め來るとき往々私共の心に感服のできないことが多いのである。どうして神であり、佛であることを知ることなのか、神や佛は單なる一種の概念でもなく又幻影でもない、神は神を見、佛は佛を見て知るべきである、而して私の見るところ私の信するところでは宇宙唯一の絶對者であつて、又生ける人格の實在である。千古萬古今尚變らぬ宇宙の生命であり力であり人類生活の理想であり、中心である、私共のミオヤである。故に神を信じ佛を念ずるものは自ら神の如く佛の如く漸時に進んで神の人格、佛の人格に向上して愛の體現者となるのである。故に人格の伴はない信仰は眞の信仰でなく、愛の伴はない宗教は宗教でない。神の人格、佛の人格とは要するに愛の人格である。そして神の愛佛の慈悲は一切を愛し一切を許す絶對の愛であれば人の愛も亦一切を許し一切を愛するの愛でなければならぬ、されば神を信じ佛を信じ、神の如く佛の如く眞に生んとする眞の信仰は此の眞實絶對の愛の體現者とならずしてすむものではないのである、もつとも信仰の淺深によつて愛の實現する程度にもその厚薄の程度こそあれ、如何なる場合といへ愛の絶對體現を理想としなないものはないはずである。だから眞に神を信じ佛を信するものには一切を愛し一切を許すに至る。故に如何なる場合にも亦如何なる人に對しても怨親平等の大悲となり、自分を殺害する人の爲めにも無限の同情と慈愛とを以つてこの人の爲め、この人の向上を祈らざるを得ないのである。否少くとも此の理想に生き此の祈りに生きてこそ初めて眞の信仰、眞の生活といふべきである。神を見、佛を見るときは此の神の愛を見佛の愛を見るときこそである。愛のない宗教は眞の宗教ではない、又愛のない信仰は眞の信仰ではな

い。即ち信仰の淺深は愛の淺深による、故に一切を愛し一切を許すことのできない信仰は未だ其の人の信仰の完成を示すものではない。彼の人を攻め人を怨み、人を憎み人を惡む、更らに進んでは人を陥入れ人を惡ざまになす斯くの如きは單に其の人の信仰のないことを示すばかりでなく、眞に又其の人格の下劣貧弱なることを示すものといふべきである。況んや僅かの利欲から、反つて十年の知己をも裏切り、僅かの意見の相異から、百年の交はりも斷つに至つては到底道を求むる眞人の夢にだに爲し能はないところであつて、又道を求むる人々の骨髓に徹して忘るべからざることである。宇宙は唯一であり、萬法は一體である、此の一體の心が神の心であり、佛の慈悲である、故に、神の心が直に私共の心愛の心でなければならぬ、神を信するも佛を信するも要するに愛の體現である。されば神を信したるキリストの如く、佛を信したる釋迦の如く私共の信仰生活は神を中心とし、如來を中心としたる愛の生活こそ眞の生活といはなねならぬ。(五、一三)

佛を求めやうとする欲求は佛を得たのである。信仰を得やうと焦慮つてるのは既に信仰を得てるのである。其眞監を變つた形で擱んでるだけだ——即ち自分の満足せぬ形で捉へてゐるだけである。自己が満足し、自己の内なる佛が領いた情態が「解決」であり「獲信」である。それが他の許容をも得た時、眞理と呼ばれ一般的普遍妥當性が賦與される、それが眞の信仰であり、佛である。

懺悔録(續)

演 阿 彌

私の總ての創造主であり給ふ如來様よ。私は懺悔して居る積りで實は懺悔を弄んで居るのではないかを恐れます。日常の事實に於て一旦自分と云ふ者を捨切つて仕舞つたにも係らず再び地上の榮華に心を痛め行く私自身の膺甲斐無さを悲しみますと同時に斯様した心を持つ私が此の尊い紙面を汚しつゝある事を痛心いたします。書いたる跡を讀み返すのさへ痛ましき羞耻です。私が今ま厚顔の人と成る爲めに苦しき思ひに胸を痛ましめつゝある事は單に「修養」よと斗り人前を繕ふ程安價な物ではありません。私の生命を削り私の不滅に關係した重大事項の一であります。此間も或友から深刻な注意も受けました。私も亦た幾度か惱み幾度か中止し様と致しました。けれども此の拙劣なる一篇の目的は單なる懺悔ではありません。單なる告白でもありません。余りに不信者であつた私
が本當に如來様を信じ得られた不思議さにせめて

は求めて未だ得給はざる多くの友達に多少なり共御參考の資料ともして頂きたく、又た一面には先覺の方々に私の間違つて居る點を御訂正して頂きたいと云ふ事。及び此二つの事を以て私の向上に回向したいのでございますから、思ひ切つて書いて居るので御座います。それで私の墮落のどん底である名古屋時代の事を少し委く書かふと思ふ考を更へまして極概略丈に止め而して早く目的地に達したいと存じます。乍併如來様の聖意を現はし得ない哀れな私を御憐れみ下さいませ。

偕て私は此頃から烟草を習ふのに苦心致しました。如來様！。アナタがこんな物迄も與へ玉ふて試みの一として下さいました事を感謝致します。之に就ても巡查に叱られたり其他馬鹿氣な事柄もありませんが申上げません。唯だかゝる事に依つて段々墮落の深みに沈み行く事を御想像下れば結構です。又た學校では夜間外出は絶對禁止で若し犯した者は其内容に依つて幾日禁足幾日謹慎幾百禮拜等の體罰と操行點減點、殊に非道いものになると退學處分迄もされます。それはかなり學生達への

脅威であるにも係らず私は人並以上に御腹がすいたと云つては温飽屋に行き面白い芝居があると云つては劇場に行つたりしました。私の品行は段々悪化して参ります。二學年の終り頃からモウ學課などは馬鹿にし切つて勉強などはさつぱり致しません。机にしがみ附いて居る人達は頭の悪い連中のする事だと見縊つて「蒲鉾」などと輕蔑して居りました。段々高慢しやられて参りますに附けて悪魔は益々食ひ入つて参りました。あゝ恐しい誘惑は終に來ました。三十位になつて居るCはTとKと私とを唆かして或る夕べ恐しい遊廓へ案内致しました。私達三人は遊里へは初めての事であり又女と云ふものを知る最初の行動でもありして唯だ好奇心で一杯になつて居た様なものゝ身體はふる々々震へて居りました。殊に私は十七のまだ子供でありましたから異性の手に觸れた時恐ろしさに小さく而して堅くなつて居りました。然も私に取つて唯一の尊き童貞は聞かすも忌しき卑しき職業の女に依つて汚されて仕舞ましたのです。あゝ何と云ふ恐しさでせう。今でも鮮かに當夜の光景が忍

べれます。モウ一旦破られた後は誘ひ誘はれして足繁く通ふ様になり終には私一人でも行く程に益々墮落の深淵へと滑り行くのみでございます。學校の寄宿舎は唯だ眠る場所と變り果ては朝食は何時も晝に而して午後から漸く教室に出席致します。本當に淺間しい事で御座いました。かゝる内にTとKとは花柳病に罹り手術を受けねばならぬ身となりましたが幸か不幸か私は何とも無いのよい事にして少しも耻づるなく地獄の釜の底を輪廻して居つたので御座います。こんな月日を送つて居ります内遂に十九の夏が來て學校を卒業せねばならぬ様になりました。思へば丸で夢で御座います。かくの如くして早くも私は青年となりましたので御座います。

あゝ常に私を生かし給ふ如來様よ。私は其年の八月初めて母に連れられて上京いたしました。今迄の學校は中學程度四年でありますから立體幾何や三角やはありませんし、物理化學等も極く初步に過ぎませんでしたから夫等を一ヶ月程準備して某私立中學の第五學年に編入いたしました而して

興學舎と云ふ私立の學寮に入れて貰ひました。S、I、O、Tの諸兄は帝大にT兄は一高に死んだ赤尾兄やW兄等は早大にY、O、E、K兄は中學の五年に其他英語をやつて居る人醫者にならうとして居る人なぞで十八九人居りました。今では大概學士や博士やとゑらくなつて居られます。此時分の舎は本當に多士濟々たるものでありました。無論自治體でありましたから夜間の外出は自由で御座います。妙にひねくれて居る私は自由を得て却ておとなしくなりました。墮落に沈み行く可き私の進路が斯くの如く一時阻止せられたのは今又一つ此頃戀と云ふ物を味ひ初めたと云ふ一大理由もありましたからでもあります。けれども深く々々胸を炙ぐる様な戀ではありませんでしたせう。今になつて思へば淺薄な上邊を軽く搔くと云ふ様な類であつたかも知れません。けれども當時の私は唯だ獨り忍び泣く遣瀟無き思ひに満たされて居りました。而してかなり深刻な胸の痛であつたかの如く思つて居りました。私はよく淺薄ではありましたが悲痛な詩を作つては自ら慰めて居りました。

た。死んだ岩野泡鳴さんから遊びに來いとの手紙を頂いて其頃上野の西に居た氏の寓居に行つた事もあります。其れからモウ一面には高等學校への準備もあつて遊ぶ暇もあまり有りませんからでもありました。けれども私の智的要素は名古屋時代に爛れ膿み而して壞血して居りましたから勉強の仕方なども不徹底極つて本當に今になつて耻かしくてたまりません。三月中學を出てから神田の正則學校に行き其夏にY O Eの三君と一處に一高を志願しましたがY兄斗り通つて他は駄目でした。元來私が一高を望んだのは身の程を知らぬ振舞であつたのです。それで今一ケ年間準備すべく爛れぬ昔に立歸つて望と力との充實に奮ひ立ちました。けれども實は虚榮を歡ぶ影に過ぎなかつたので御座います。處が私の父は永く中風になつて居られて私の歸るのを一日千秋の思ひで待つて居て下さるのです。話は前後致しますが私が宗門の學校の卒業證書を御覽に入れた時なども涙を流し乍ら押頂いて喜ばれました。私は我知らずほろ々々と泣きました。嗚呼父はこんな迄私を待つて居

て下さるのだと強く心を衝かれました事もありました。愈々待ち切れなくなつて早く歸る様に歸る様と頻りに請求をされます。最早や加行も濟んだしおまけに高校の撰抜試験には落第したし愈々益々歸へれと申して参ります。私も其頃健康を害して少し早足に歩くと息切れがします。精神も感傷深くなつて如何も肺病になつたのではないかと氣になつて仕方がありません。青山内科の診斷を受けた處輕度の神經衰弱だ相です。而して今一つは徴兵検査の事もありして一度どうも歸らなければならなくなつて明治三十七年の五月に一寸歸へりますと、モウ手を合せて御自分の子である私に勿

體ない程の御言葉で呉れくも御頼みになるのです。噫、何と云ふ不孝者よ。私は此時程悲痛な思ひをした事はありません。實に斷腸の思ひでありました。母も泣きました。私も泣きました。而して急轉直下私は今の寺に住職せねばならぬ様になつたのでございます。すると間もなく本當に安心せられた爲めだと存じますが其六月十八日の明け方安かに命終せられました。私は生れてから貳拾壹の永い年月に唯だの一日も父に孝行せんとする念慮を抱いた事がありましたらうか、如來様よ。アナタは如何して私の様な不孝者を御罰しになりませんかですか。あゝ如來様！

自分には實際人を慰めたり、導いたりする力があるだらうか。自分にも疑ひである様な事を平氣で吾が物顔に喋舌つてゐる様な事は有りはせぬか。自分免許で傳道者に高昇りして居りはせぬか。教へると云ふ態度を下つて俱に慰さめ合ふ、疑ひ合ふ兄弟となる時、苦しみの儘が楽しみになつて來る。そして教へられる氣持になる時平氣で喜んで進んで行ける。

供養

自由俱樂部にて

今日は父の命日だ、だが莊嚴も供物も無い、例に依てお線香が一本きり前で濫い香りを立ててる丈けだ。

『お父さん！ 今日だけは美しい花の一束と柏餅の三つ四つも献げたいと思ひましたが、悠夔貧窮生活では其れも十分思ふ通りにはなりません。而し、勿論菓子とお花を買つて上げる程のお金が無いのはムいませぬ。無い所でそれを整へて差し上げるのが本當に美しいのでせうか。かと云ふて今の様な私が改めてそうせないからとて怒られる様なお父さまでもないと思ひます、今の私の有様と私の心持ちとを見徹ほして御存じのお父さんには、必ずしも左うせなくとも斯うして謝罪つて私をゴ覽になつた丈けで、十分お解りの事と信じてゐます。

『私は今貴方の御供養に用かふ費へを、他の事に生かして用ひたいと考へて居ります。形計り賑や

かなお供養や追弔で總てを爲し了した様な氣は少しも致しません、貴方を喜ばす爲に澤山の珍味を心から差し上げたいと頻りに心が搖さしますが、私が今何をしてるか十分理解して居て下さる貴方には、今其れを果たさずして他の費用に當てたからとて、目に角立て、責め付けらるゝ様な事は無いと存じます。私は貴方にお供への一つも差し上げない處が、却て私が喰へる爲めの菜葉や味噌汁に代へるかも知れませぬ、いや實際さうせやうと今心の中で決心しました、私は今心を鬼にして自分への供物、自分への供養に振り換へ様としてゐます。

『今私への供物とする方が貴方へ奉るより價值の上に秀れたのだとの理由で左うせやうとするのぢやありません。何れへ捧げるも本質的には一だと思つて居ります。そして又私は單なる「私」と云ふ者を認めませぬ、私がお金でお腹かを満たし十分働かして頂く事は、貴方への何よりの御供養だと信じて居ます。貴方は其れを見て心から喜ばれ貴方も心から御満腹の事だと信じます。私が貴方

の分を横取りしたので無くて、私がより善く生きる

る事は貴方がより善く、より意義あつて生きられる事だと信じます。決して私は賤しい利己獨尊を擅にしたのだとは思ひませぬ。恥かしくはありませんが疚しいとは感じませぬ。私が肥える事は貴方が肥える事であり、私が愛に生きる事は貴方の愛が昂められる事であり、一切への慈光が一層輝かされる事だと信じます。『私は高慢であるかも知れませぬ、私は貪慾であるかも知れませぬ。けれど私は邪に流れては居らぬつもりであり、眞實に住して居ると信じます。私は餘り自己を誇大視重視して居るかも知れませぬ。餘りに自己を個愛し自己を以て他を引き仆し仕て居るかも知れませぬ。而し此「自己」以外に「貴方」の存在もムいませぬ。私を大切にされる事より外に貴方を大切にされる方法を知りませぬ、私が全的に生きる事が取りも直さず貴方に對する最善の勤め、仕へだと信じます。私と貴方とは一であり、私の内に貴方は嚴然と立つて在まし、貴方の内に私は生き生きてゐます。私は一層強く尊く意義あつて自分が生きんと

希つてゐます。

『私と貴方、貴方と如來、私と如來様とも一つだと信じます。此小さい私も如來様の片端したと信じさせて頂いてゐます。私が健全なるは如來の一分を健全ならしむる事であり、此一舉手一投足が直ちに佛をより偉大にし、或は辱かしめ、意義と價值の上に深い關係あるものだと信じます。自分勝手な都合の良い理窟を捏造するのではなくて、本當に一々が佛の高低に影響するのです、悉くが貴方に影響するのです。左う云ふ佛、貴方が借つてゐて下さる事を信じます……』

——それが私の一面の佛で、動的、未完成の變化的佛であります。常に私と俱に泣き、悔しみ、又笑ひ喜び、吾と一なる神であり、其れが私の父の姿だとも又私の眞實相だとも趣向しつゝ、ある過程、其一つの事實を生む爲めに二つの佛が説明的に必要であつたのです。此一つの動き行く持續こそ何物にも更へ難い佛だと信じます。比較を絶した獨尊なるもの、有無の意識波紋をも其上に留めぬ純淨なものであります。反省、批判、破壊、建

設——と此等を綜合した、一つ「創造」の廻轉運動として現はして行く事こそ、最も願はしきものであります。此走り走つて撓まぬ至淳のみに、總ての刹那を生き切つて見たいと念はれます。

——それが祈りの情態であります。

常に慕ひ慕ひ、戀ひ戀ひして歇まぬ姿、求め求め進み進んで止らぬ無停滯、無間斷の充實こそ眞の祈りであります。即ち「非」として斥けた出發點も或は目標歸着點とした「理想」も共に其姿を消してたゞ一の「力」として相融し現實化せられた一大事實であります。眞に念佛は躍如たる存在としての一の生命であり、無始無終を貫く無限への連鎖であると共に、其れ自身亦無限不滅の一點であります、即ち絶對泡和情態に在る全的意義の體示であります。祈り得た事實より偉大なるものはありません、如何なる力も完全に其れを消す事は絶對に出来ません、其れより大なる緊張はありません、それ以上の價値は無いのです、佛とも衆生とも、彼とも我れとも、名は廢うでも善い、眞に此全的進動、無礙増上力の事實を掴みそれに生き通

せれば善いのです、其れ以上の望み願ひはありません。

念佛の裡から總てが湧いて來ます、顯はれて來ます、綜ての道が自然に啓いて來ます、そして自分が無限に延長されて行きます。眞に祈り得る者は幸ひである。(中野尅子)

行基寺別時錄

沃野萬里の大平原から崛起して、揖良木曾の三大流を脚下に點してゐる丈けで、もう悉皆り超脱したスガ／＼しい氣分に淨められてゐた私共は、土屋御上人の會下に七八十名も一向專念に別時稱名さして戴いた感激は、とても口には現はせられませんが、満願の且は本當に皆が歡喜の涙に咽んで、身震ひする様な感銘を享けました。そして皆が力強い體験の事實として永久に記念いたします。此間終始萬事に亘つて御世話して下さいました御寺の御好意を吳々も感謝いたします。

南無阿彌陀佛

祈から祈りへ

大野 顯 道

比較的滑らかな道を歩んで來た私は深い思索や冥想に多くの時を費す事なく、隨て道を求める心も引連られ勝ちて、自ら求め掘り抜いて行くと云ふ程の深酷さが無かつた、膝たゞく程の肯定もなければ、さればとて喰いついて疑ひ抜く程でもなく、只殊勝氣に威儀にはまり込んで念佛して來たのであつた。其樹にはボンヤリと光つてゐる宗乘的な白道が開かれてゐるのみに過ぎなかつた。けれ共み佛の攝理は此塵手ナマヌルイ私をこのまゝに見捨て、置かれる程無責任ではなかつたのである。私には最初の破産が與へられた。それは確か一昨年夏であつた、N、H、兩兄と一週同程靜岡の別時念佛に出掛けたのである。毎朝手探りで殿堂に入り夜は更くる迄念佛を續けた。一日午後から休んで兩兄と三保の松原へ行き其の歸途時間の余裕から小舟を借り受けて再び沖の方へと漕ぎ出たのであつた。無雜作に架けられてある羽衣の

橋や松林が見える様に遠ざかつて行く。射る様な光線は京の波風に和して、私等に秘められてゐた力を呼び起さふとしてゐる、破裂する様な勢で寮歌が飛び出した。それまでは善かつたが、どうしたはづみにか突然櫓のはめ込んであるところが折れて仕舞つたのである、そして舟は波のまに／＼漾ひ初めた。晚鐘の空は薄墨で蔽はれ、横波が一層私等に不安を喚び起さしめた。今まで快を盡して呉れてゐた海原は全く瘴猛な呪の火口と化つて來た。この物凄いな瞬間に私の頭の中には數へ切れない程の多くの概念が電の如く走り廻つてゐる。生！死！お、吾々は今はこの兩者に吾々の片足づつを架けてゐるのだ、そして生の足場は一刻一刻と崩れ落ちてゆく——問髪の余裕さへ見られないうちのこの場合に私等は已に用意せずして眞劍になり切つてゐた——お、俺は今本當に生きてゐるそして次の瞬間には死と云ふ事實が俺の全體を占領するのだ——この眞劍な一寸の弛みのない瞬間に私の全身は全身が祈りと化つてゐたのである——救つて下さい——本當に私の全體は佛に捧げ

切つてゐた、而もそれは佛の範圍を犯す程の祈りを捧げてゐたのである。このかき亂れた心持ちの中にも祈りには眞剣であつたのだ……幸にも夕を急ぐ漁船は私等を見出し呉れた。近づいて来るあの親舟から一條の綱が私等の舟に投げ與へられた時、その綱を掴んだ刹那に「あ、救はれたのだ」と判切り意識されたと同時に唯もう涙あるばかりである。先きに勝る深酷な祈りが異つた心持ちで全身から惨み出て来る、この浮沈の事實を西山に腰を下して見守つてゐて呉れた陽は「すべてがそれで善いのだ」と口吟み乍ら會心の笑を洩して静かに下りて行く。

私は眞剣に「救つて下さい」と叫んだあの刹那の氣持が恐しい程判切り私に刻みつけられてゐる。あの場合の祈りの氣分は確かに不純の分子が交つてゐた、無理押付けに佛の範圍を犯した祈りであつた事が今私は悔いられる。佛様はあの時私を見てカラクリ人形の踊つてゐる如く杖なき盲人の躑ぎの如く私の姿を不憫に思召した事であらふ祈りには眞剣であつたが私の心が掻き亂されて

ただけに不徹底がある、自己の全分を捧げて居た事は事實であるけれど其眞なる意味に捧げては居なかつたのである。私は佛の攝理の中に私の全分を任せるべきであつたのを私は勝手に佛を弄んでゐたのであつた。畢竟私の信じ方だけの佛より現はれてゐなかつた譯だ、私は自分の愚かさを思ふにつけても十年一日の如き案山子の念佛が悔れられてならぬ、而し乍らこの海上の遭難の一件は私への恵まれた限ない恩寵であつた、到底自力では得難い尊い慈悲として痛感せずには居られない、威儀に縛られて佛を逐ひ廻したり弄んだりしてゐた様な祈りからこの單なる一事件が生んで呉れた祈りへの覺醒が一層強く眞剣に體驗から體驗への深い生活の根底となつて呉れたのである。私は如何なる場合も祈り得る事が出来る、又祈らずには居られない、闇から流れて来るリズムに對しても廣野を彷徨ひながらも、又は殿堂の中ペン探る机の前にも静かに念佛を唱へる時私は己に私でなかつた、そして而も私自身であつたのである。この端的に南無阿彌陀佛と唱へた時全的に捧げ而も眞剣と充實とで内容づけられてゐる祈りが自分で善く判る様に思へる。(五〇・十二)

吾が朋便り (四)

○佐賀 永田恵眼様より
眞生を送付に預り非常に有難く拜讀致して居ます。就きましては三身説は度々聽きますが一向頭に残りませんから極く平易に載せて頂きましたら一層如來中心の人類生活の謂たる眞生が明になりはせんかと思ひます。

○名古屋 金子白夢様より
生活を深化し、生活を體驗附け現代生活を淨化して行く所に御互の生活があるではありませんか、此點に於て私は教兄の辿られて居らるる道が私のそれと同じ道であることを喜ばずに居られせん、飽くまで徹底信に生きて深刻な純眞な生活を生き、生活自らが宗教と化つて其の表現形式がそのまゝに私共の傳道と成るやうに祈つて居ります。私は目下第三の著作「神祕の宗教」の校正申です。……私も

その中「眞生」に何か書かして頂きます。

○岐阜 白旗靈光様より
眞生の降誕は開宗七百五十年の流れを輝かす光であるを信ずると共に常路の諸氏の眞剣な努力に感謝して居ります、封建的信仰を破つて眞實の宗教の輝いてゐるこの誌の言々句句々は法然上人の御言否如來の眞説と信じて歩一歩光への道を歩ませて戴いて居ります。

○高崎 松園様より
創刊の辭を讀みて、先生私は幸に、神のやうに正しい、佛様のやうに麗はしい心を理想としてゐます。そうして他人とは争もなくいやな感情もなく、何時もにこにことした平和の心を持って、お互に限りなく向上して行きたいと思ふて居ります。けれども私は何時も心には思ひながら、之を表現することが出来ないのでございます。無口な人なつみの悪い、交際の下

手な私は、どうしても人様と輕々とお友達となる事が出来ないで、何時もいつも残念にはかり思つてゐます。

又毎日の仕事もてきばきと處理して行く事が出来ず始終仕事に追はれてばかり居ります。此様の有様で、心はやたげにはやりながら日々に進歩して行くことができないので、つくづく我身の愚と實行難を感じて居ります。

▲編輯室より

○お茶の水駅から流れて来る汽笛が判切り聞える位夜が更けて來ましたので全力をそよいで編輯しました。
○此頃梵兄の歸國中で全くの一人ポツツなのですべての點に手落ち勝ちで皆様に申譯のない事と思つて居ります。
○この誌に對しての御批評なり御感想を伸び行く、糧にお與へ下さいませ。
○原稿はなるべく毎月十日までに御送付を願上ます。

誌代拂込者並寄贈者

芳名左の如し

△誌代の部▽
 各一圓 本誓寺 圓心寺 行基寺 河瀬喜和 森喜介 片桐照子 伊藤兼子 大野榮子 河瀬喜美子 伊藤花子 西村錠子 服部新次郎 小澤安子 堀田京子 内田友子 大野政二 松浦重三 栗本貞一 横田定吉 杉崎彦太郎 林香寺 良福寺 松月庵 阿彌陀庵 山上庵 求淨庵 山田正圓 十劫寺 片岡利藏 吉井たけ 戸田さわ さ 松平警雄 大矢知友右工門 板津 助右工門 米田 傳司 小室 華雲 池田喜一 小西勝太郎 井上ハル 富野トク 小幡爲次郎 内藤尠夫 念佛寺 加藤 教純 伊辻 源兵衛 三宅專敬 永田 惠眼 門野いさ 五島辰次郎 長澤みね 櫻井とよ

櫻井くに 國峯かく 吉村ゑい 大塚はる 關口はる 糸井あい 島村りう 唐澤つぎ 小林ひて 小保方ひて 山崎ひさ 山崎よう 小澤うた 小林りう 魚住せい 大塚ひさ 井上げん 竹要しづ 上原さく 藤澤やす 中島梅 永松愛 石橋はや 藤井ふじ 二圓 養春院 石山基弘 五拾錢 野中 虎次郎 大坪 文治 深見眞達 三圓 高橋榮一 原吉郎 關浦ま

寄贈雜誌

□明照 □法輪 □光
 □西亞藝術 □更生 □奉仕
 □自働道話 □神の道 □こころ
 □新生 □光の友

△光明教壇

（駿河臺お茶の水閣下専明治大學正門右隣）
 □定日口演會 毎金曜日 土屋先生其他
 □修養口演會 第三土曜夜 西川光二郎先生其他

△自由俱樂部

□每週月、水、金曜夜其他隨時
 □金曜夜 土屋先生座談會
 □第三土曜夜 西川光二郎先生座談會

振替口座東京四七武八八番眞生社

大正十一年二月二日第三種郵便物認可
 大正十一年六月一日發行毎月一回一日發行
 定價一部十錢 半年六十錢 一年一圓

編輯兼 土屋 觀 道

發行所 眞生社 東京市神田區駿河臺袋町一番地

印刷所 眞生社 東京市外西巢鴨町二七二番地

印刷所 無我山房印刷工場 東京市外西巢鴨町二七二番地

印刷所 廣宣社 東京市外西巢鴨町二七二番地

大正十一年二月二日第三種郵便物認可大正十一年五月三十日印刷納本大正十一年六月一日發行(每月一回一日發行)